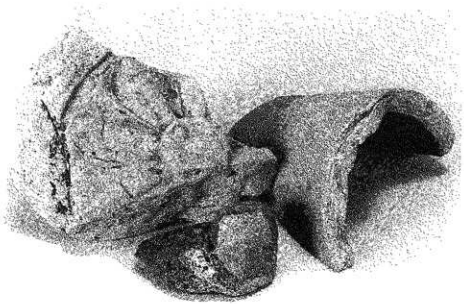
尾張元興寺跡

第12次発掘調査報告書



2008

名古屋市教育委員会

例　言

1　本書は、名古屋市中区正木四丁目516番で実施した尾張元興寺跡第12次発掘調査の報告書である。

2　調査は、共同住宅建築工事に伴って実施し、対象面積は125㎡、期間は平成19年4月16日から同年5月18日である。また、調査後に、同敷地南側で追加工事部分（この調査区を南区とした）の立会調査を行ない、その記録を本書に含めて報告した。

3　発掘調査に関わる調整事務は、名古屋市教育委員会文化財保護室学芸員藤井康隆が担当し、発掘調査を実施した名古屋市見晴台考古資料館の担当者は、学芸員田原和美、水野裕之である。本書は担当者および同館の伊藤厚史、服部哲也、村木誠、綿繭茂、市澤泰峰の協力を得て水野が執筆した。

4　本書で用いる水準値は、東京湾平均海水面（T.P）、平面図の座標は、国土座標第Ⅶ系（世界測地系）によっている。

5　調査の記録類、出土遺物等は見晴台考古資料館で保管している。

目　次

1　位置と環境・・・・・・・・・・・・2

2　調査の経過・・・・・・・・・・・・2

3　調査の成果

(1) 基本土層・・・・・・・・・・・3

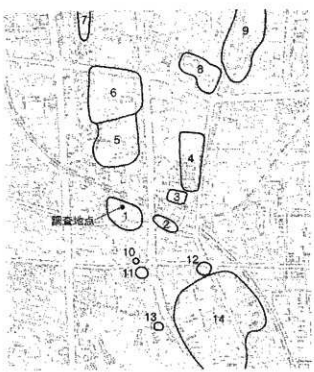
(2) 遺構の概要・・・・・・・・・・3

(3) 遺物の概要・・・・・・・・・・3

(4) 遺構と遺物・・・・・・・・・・7、8

4　まとめ・・・・・・・・・・・・・14

〔表紙写真は、出土した軒丸瓦、浄瓶、須恵器・土管〕



1 尾張元興寺跡　2 東古渡町遺跡　3 金山北遺跡　4 古沢町遺跡
5 伊勢山中学校遺跡　6 正木町遺跡　7 松原町遺跡　8 古渡城跡
9 富士見町遺跡　10 住吉神社東遺跡　11 沢嶋薯堂貝塚
12 熱田村城　13 瓜屋橋遺跡　14 篠原遺跡

図1　尾張元興寺跡の位置と周辺の遺跡
(1：25,000)

1 位置と環境

当遺跡は、名古屋市中央部から南へ伸びる半島状の熱田台地西側に位置し、標高は8～10mほどである。

北側には、県内最古の須恵器群が出土している伊勢山中学校遺跡、正木町遺跡、東に東古渡町遺跡、南に弥生時代以降の大規模遺跡である高蔵遺跡と東海地方最大の前方後円墳である断夫山古墳、さらに南側の台地端部には、7世紀後葉の創祀とされている熱田神宮が所在する。海路、陸路とともに、古墳時代から古代にかけ中央との関係で、当地方の中核的な地域であったと考えられている。

『日本紀略』の元慶8年（884）の条に「尾張国愛智郡定額願興寺を国分金光明寺となす」の割合があり、これが当遺跡（「尾張元興寺跡」は現在の遺跡名）の古代寺院址にあたると考えられる。この条には、尾張国分寺（稲沢市）が火災で損失したため、「願興寺」がその代替寺院とされたことが記されていて、9世紀末頃には、国家が管理する寺格であったことがわかる。

また、これまでの研究や発掘調査した古代瓦の分析、考察（服部1994、2002）から、東海地方最古の寺院址で飛鳥・白鳳時代の7世紀中葉頃にさかのぼると考えられている。

「願興寺」は、10世紀以降には衰退し、13世紀前半頃、鎮西八郎為朝の子、尾張次郎義次が再興したとの伝承もあるが、その後荒廃し、18世紀前葉には、「国蔵山元興寺」として再興された。

2 調査の経過

発掘調査は、敷地内に掘削排土を積み置く関係で調査区を東半区と西半区に分割して調査した。

調査区中央部では、大型の掘り込み（SX01）が検出され、埋土から近代陶磁器類（古代瓦片等も含む）が出土した。このSX01は、出土品の多くが近代以降のものであることと、深度が深く排土量が膨大になることから、現地表下1.2m前後

図2　調査位置と周辺の主な調査地点（1：6,000）

写真1　東半区（西から）

写真2　西半区（東から）

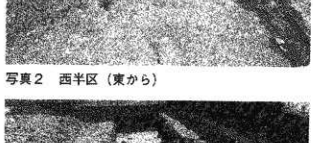


写真3　南区（西から）

までの掘削に止めた。

主な検出遺構は、近世等の土坑であったが、古代瓦、古墳時代～中世の土器、陶器類、近世陶磁器など調査時点の出土遺物量は、コンテナケースで9箱分ほどであった。

3 調査の成果

(1) 基本土層

調査区では、地盤層である熱田層が地表下60～80cmで検出された。この面より上に堆積していたのは、近現代の土層であった。本来この遺跡で形成されたであろう古墳時代頃から近世頃の包含層は、当地では主に近世以降の造作のため失われ、遺構埋土での土層観察記録が主であった。

(2) 遺構の概要

今回の調査では、遺構の大部分を熱田層面で検出した。遺構は、中央部のSX01(近代の廃棄土坑)を除く部分では、近世の土坑数基と性格が不明の並列する細い溝状遺構などがあった。古代の「願興寺」に関係する遺構は検出されなかった。

明治17年の地籍図と現在の地図を比べるとSX01の位置は、享保3年（1718）の元興寺建立以降の敷地と思われる地割の北に隣接する土地の裏手の最後部にあたる可能性がある。

(3) 遺物の概要

遺物は、主に近世の土坑（SK01、03、04など）と近代のSX01から出土した。遺構の時期の遺物に混入して、古代や中世などの土器、陶器類や瓦片が検出されている。

縄文・弥生時代や古墳時代の遺物も少量検出されたが、該期の遺構がほとんど検出されていない状況は、これまでの他の調査地点と同様であった。

古墳時代では、5世紀の初期須恵器を伴う頃の遺物群があり、正木町遺跡や伊勢山中学校遺跡との関連を示す。7世紀後半頃と思われる須恵器・土管や軒丸瓦、9世紀頃の灰釉陶器の浄瓶片などは、古代の「願興寺」に関連し、注目される。

写真4　西半区北壁土層断面（部分）

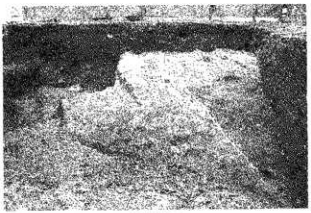


写真5　西半区西壁土層断面

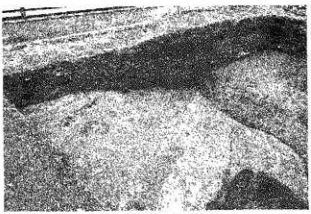


写真6　SK03他検出状況（西半区）

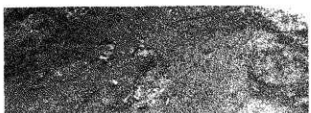


写真7　SK04擂鉢出土状況

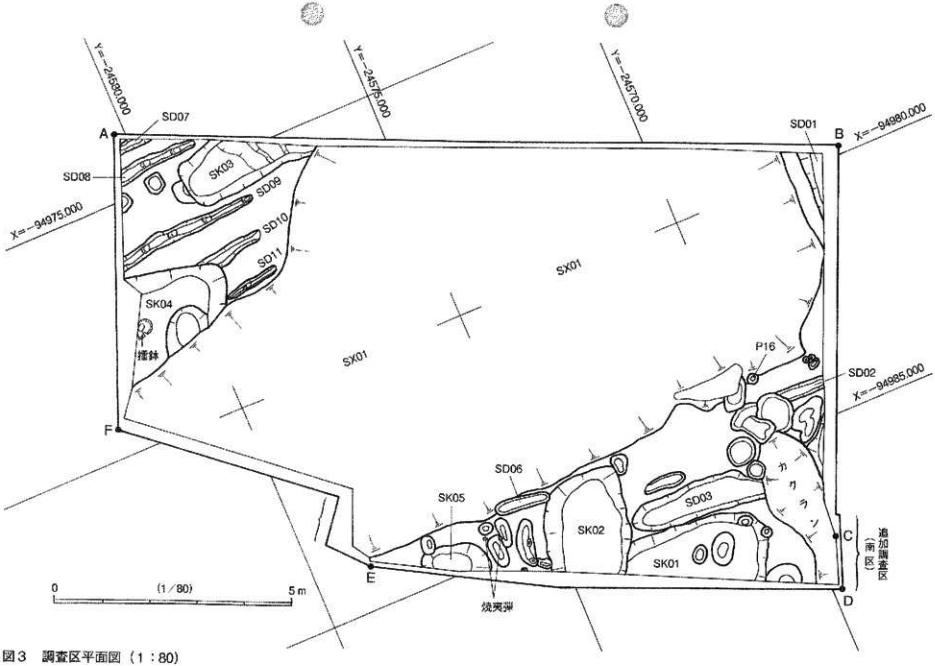
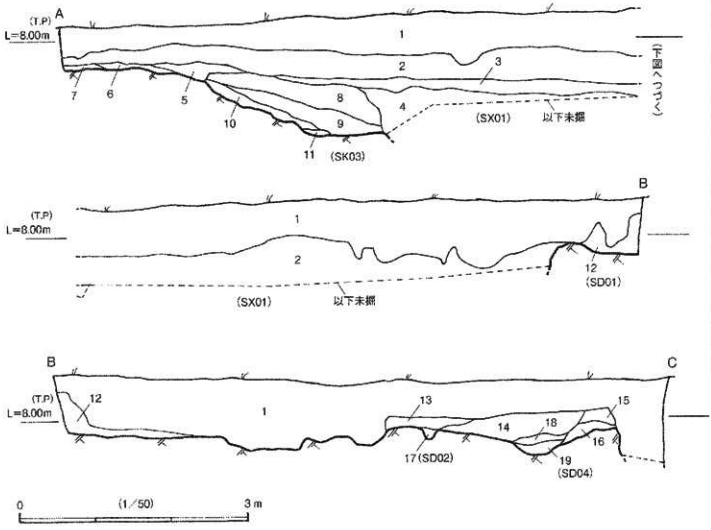


図3　調査区平面図（1：80）



1 表土・カクラン土
2 暗褐色土など（近・現代の層。SX01 埋土含む）
3 黒褐色土（近代）
4 灰褐色土（近代、SX01 埋土）
5 黒褐色土、黄色土ブロックをまじる。
6 灰黄褐色土
7 黒褐色土
8 黒褐色土
9 灰褐色土
10 黒褐色土
11 濃黄褐色土
（SK03 埋土）
12 灰褐色土（SD01 埋土）
13 褐灰色土
14 灰褐色土（近世～）
15 褐色土
16 黒褐色土
17 灰褐色土（SD02 埋土）
18 暗褐色土
19 黒褐色土
（SD04 埋土）

図4　調査区土層断面図（北壁と東壁）

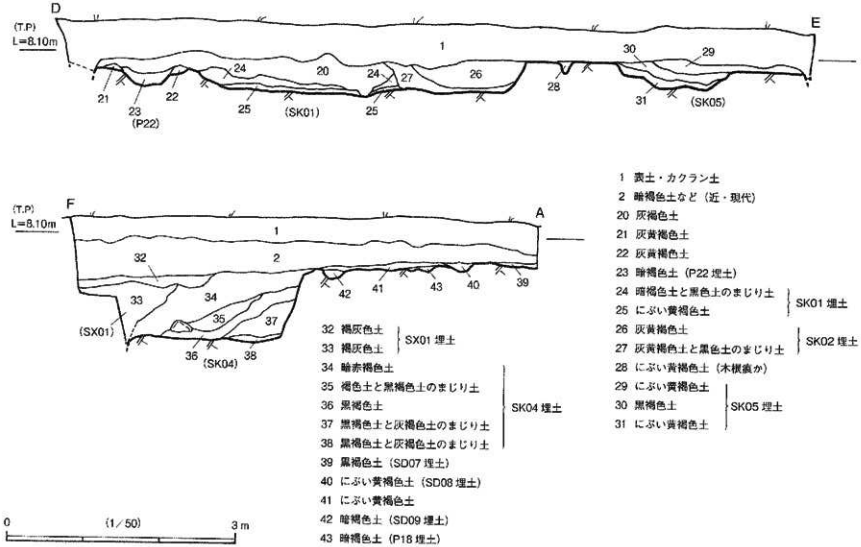


図5　調査区土層断面図（南壁と西壁）

(4) 遺構と遺物

● SK01

調査区南端で検出したが、調査区外へ続くため形状、規模は不明確である。検出面（熱田層）から底部の最も深いところで、約 30cm であった。底面にピットが2基あるが同時期のものか不明であった。出土遺物は、江戸時代前期の陶磁器片と古代瓦細片がわずかに出土した。

● SK02

調査区南端部で検出した。幅約 1.8m、深さは、検出面から約 40cm で熱田層の大きなブロックを混入した埋土を検出し、当初の検出ではピットの集中部としていた。平面形は、不整楕円形と思われる。出土遺物は、須恵器や古代瓦、18 世紀頃の瀬戸美濃陶器鬚錆茶碗の小片が出土した。上層の切り合い関係は、SK01 を切っている。

● SK03

調査区北西の隅際で検出したが、調査区外へ続く。幅が 1 m前後で、東へ向かって下がる階段状の底面となる。出土遺物は、古代瓦、灰釉陶器、中世陶器片を比較的多く含むが、近世の桟瓦片、江戸時代後期の陶磁器類が検出された。

● SK04

調査区西端部で検出した。当土坑は、平面形（隅丸方形か）、壁面、底面ともに整形してあり、「地下室（ちかむろ）」であったと思われるが、全体の形状、規模は不明である。埋土からは、古代瓦片のほか、弥生土器片、須恵器、土師器片を比較的多く混入するが、近世陶磁器、近世瓦片が出土した。

● SK05

調査区南端で検出した不整楕円形と思われる比較的小型の土坑で、検出面からの深さは、20cm あまりであった。出土遺物は、近世（？）常滑甕片がわずかに出土した。

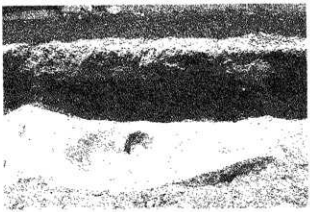


写真 8　SK01（南区）

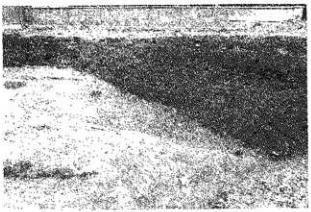


写真 9　SK03

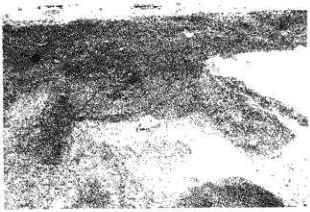


写真 10　SK04

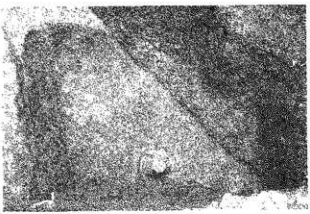


写真 11　SK04

● SD01

調査区北東端で検出された遺構の一部である。検出部分の縁辺は直線状である。出土遺物には、古代瓦のほか、17 世紀頃の擂鉢小片がある。

● SD02

幅、深さとも 20cm ほどの溝状遺構で、長さ 1 m弱を検出したのみである。江戸時代と思われる染付磁器と常滑甕片がわずかに出土した。

● SD03

幅約 70cm、深さ 10 ～ 20cm、長さ 3 m弱で東側をカクランで失っている。埋土には、古墳時代の須恵器、土師器、古代瓦、中世陶器片を含むが、江戸時代中期頃までの陶磁器がわずかに出土した。

● SD04

調査区東端際で検出した遺構の一部であり、形状は不明である。埋土からは、幕末～明治期頃の染付磁器片と陶器鉢片がわずかに出土した。

● SD06

幅約 25cm、長さ 1 mあまりの浅い溝状遺構で、埋土からの出土遺物はなかった。

● SD07 ～ 11

幅 15 ～ 30cm、深さ 10cm ほどの並列する細長い溝で、溝底に小柱穴が残る。出土遺物がほとんど無いが、埋土などからみて近世以降の遺構か。

● SX01

調査区中央部の大規模な廃棄土坑と思われるが完掘していない。明治時代以降の陶磁器類、桟瓦片を多く含むが、古代瓦片等も多く出土した。

● P16

「寛永通宝」が埋土から 1 枚のみ出土した。他に検出したピットとともに、建物などの形状や、用途、時期については不明である。

● 焼夷弾

追加調査した南区の熱日層面（基盤層）に刺さった状態で 2 本検出された。検出面以下は、約 30cm 残っていた。第 2 次大戦時の投下による。

写真 12　SD01

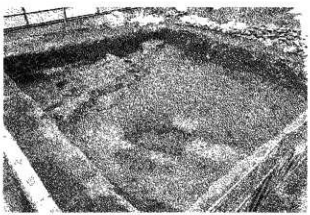


写真 13　SX01（東半区）

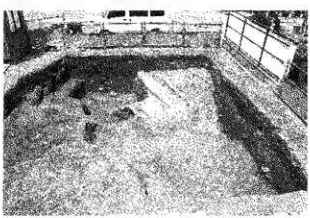


写真 14　SX01（西半区）

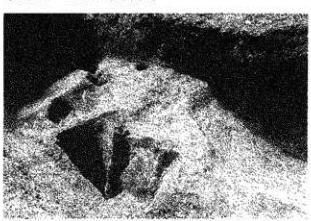


写真 15　突き刺さった状態の焼夷弾（南区検出）

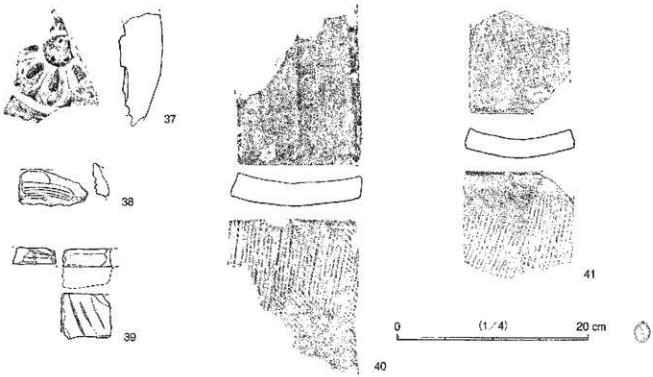


図7　出土した古代の瓦（1）

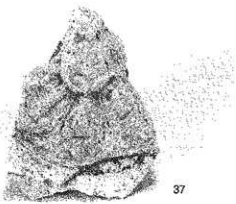


写真24　軒丸瓦（SK03）

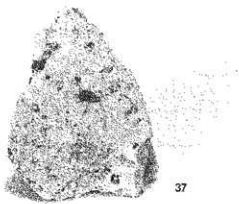


写真25　同左（裏面）

写真26　軒丸瓦片と軒平瓦片（SK04）

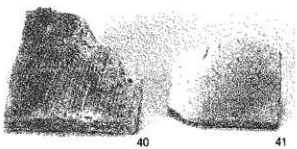


写真27　熨斗瓦（SK04）

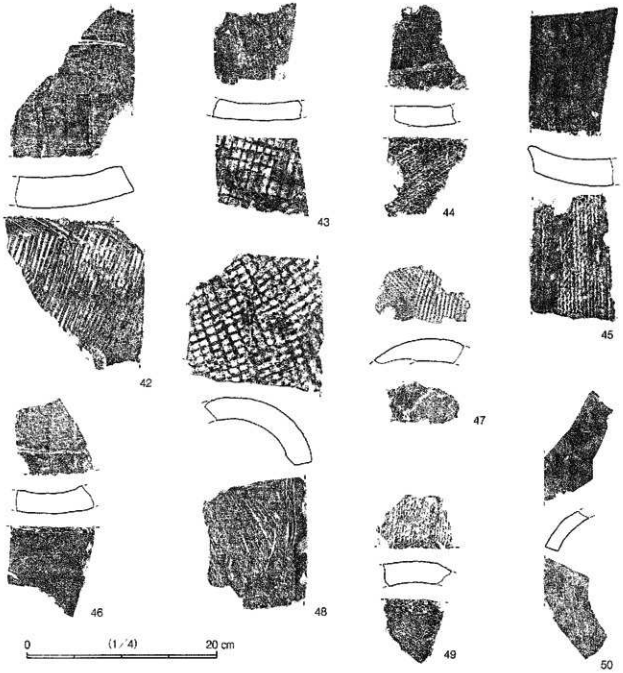


図8　出土した古代の瓦（2）

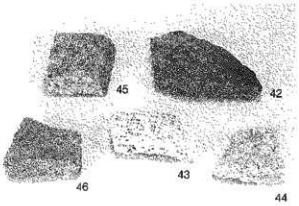


写真28　各種タタキの平瓦片（SK03、04）

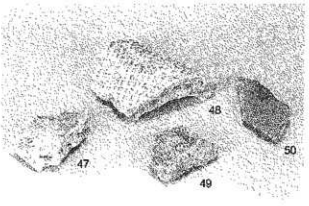


写真29　各種タタキの丸瓦片（SK03、04）

表1　遺物観察表（本書掲載遺物の番号と共通）

図番	器種名	出土位置	遺存部	備考
1	陶器・香炉	SK01	2分の1弱	瀬戸焼系。黄瀬戸釉に緑釉が掛かる。17世紀後半頃。
2	磁器・碗	SK01	口縁小片	肥前焼付。17世紀後半頃。
3	土師器・皿	SK01	小片	ろくろ成形。回転糸切痕。
4	陶器・壺	SK04	4分の1弱	上面に黄灰色釉。19世紀頃。
5	磁器・碗	SK04	約3分の1	肥前焼付。18世紀後半頃。
6	陶器・碗	SK04	約2分の1	瀬戸焼系。18世紀頃。
7	陶器・碗	SK04	約3分の1	瀬戸焼系。腰錆茶碗。18世紀後半頃。
8	陶器・徳利	SK04	底部約2分の1	雑集木刷(?)痕。陶土は本体色で微密。外面に緑灰色釉。
9	陶器・大皿	SK01	底部小片	瀬戸。19世紀頃。
10	陶器・蓋鉢	SK04	約5分の4	瀬戸。18世紀後半頃。
11	瓦・軒丸瓦	SK04	軒丸部片	いぶし瓦。19世紀頃。
12	瓦・軒丸瓦	SK04	軒丸部片	いぶし瓦。18世紀後半頃か。
13	瓦石	SK04	破片	緻密で灰黒色の泥岩。使用面は強めて平滑。
14	漆・重水通宝	P16	完存	匙食が歪み、文字不鮮明。
15	縄文土器・深鉢	SK04	口部小片	条痕文系。晩期鉢来（馬見塚式）か縄生等代前期苗平（榎平式）頃か。
16	弥生土器・甕	SK04	胴部小片	条痕文か。中期後葉（高蔵式）。最大径の位置に刻み目を施した突帯。
17	土師器・高坏	調査区南東部発出	脚部の約5分の3	大型の高坏。5世紀前半頃。
18	土師器・高坏	調査区南東部発出	脚部の約5分の3	大型の高坏。5世紀前半頃。
19	土師器・甕	SK04	口縁小片	半出土。5世紀前半頃。
20	須恵器・壺	SK04	口縁小片	初期須恵器。5世紀後半か。やや軟質不良、灰白色を呈する。体部に平行タタキ？痕。
21	須恵器・壺	東平区 SX01	胴部小片	初期須恵器。5世紀前半か。縦割文。焼質で暗灰色を呈する。
22	須恵器・器台	SK04	脚部小片	5世紀。焼成良好。明灰色。透かし部分で破損
23	土師器・高坏	SK04	脚部小片	5世紀後半頃
24	須恵器・坏身	SK04	底部小片	7世紀後半～8世紀
25	土錘	SK04	破片	径に6小破片出土。
26	須恵器・鉢か	SK04	口縁小片	8世紀頃
27	須恵器・壺	西平区 SX01	中央部破片	須恵質で焼成良好。内面はユビナデ痕であるが、粘土紐つくり成形の痕跡が残る。外面はヘラケズリ、ヘラナデ痕。現在復元径は10cm前後。7世紀後半頃か。
28	灰釉陶器・浄瓶	SK03	注口部片	注口下部の破片で、鋭利な工具によって面取りを施す。9世紀。
29	灰釉陶器・浄瓶または水瓶	SK03	小破片	9世紀
30	灰釉陶器・浄瓶または水瓶	西平区 SX01	胴部片	黒釉。9世紀
31	灰釉陶器・耳付瓶か	西平区 SX01	底部小破片	9世紀頃
32	山茶碗・小皿	SK03	2分の1弱	焼成良好であるが赤褐色を呈する。12世紀末頃
33	山茶碗・小皿	SK03	小破片	焼成良好であるが赤褐色を呈する。12世紀末頃
34	山茶碗・碗	西平区 SX01	底部約3分の1	13世紀前半頃。東濃系か。底部付近の外部縦辺を打ち加工する（加工円盤か）。
35	土製品・土錘	西平区 SX01	小破片	土師質、用途不明。中世または近世
36	土製品・土錘	SK03	小破片	土師質、用途不明。中世または近世
37	瓦・軒丸瓦	SK03	瓦当面の約4分の1	焼成やや不良で表面風化。表面は灰白色。所謂「山口型式」。瓦当は1：5。外縁部は欠損する。7世紀第4四半期頃
38	瓦・軒丸瓦	SK04	外縁部の小片	焼成不良で風化、表面は灰白色。所謂「山口型式」に伴うものか。
39	瓦・軒平瓦	SK04	小片	顎状押し挽き豊富級。顎部が顕著。顎接合部の平瓦凸面に縄目を入れる。
40	瓦・熨斗瓦	SK04	約2分の1	凸面平行タタキ
41	瓦・熨斗瓦	SK04	約3分の1	凸面平行タタキ
42	瓦・平瓦	SK03	隅部片	凸面平行タタキ
43	瓦・平瓦	SK03	小片	凸面格子タタキ
44	瓦・平瓦	SK04	端部小片	凸面縄タタキ
45	瓦・平瓦	SK03	隅部片	凸面縄タタキ（ハケレ跡）
46	瓦・平瓦	SK04	端部片	凸面タタキ消し
47	瓦・丸瓦	西平区 SX01 側	小片	凸面平行タタキ
48	瓦・丸瓦	SK03	端部片	凸面格子タタキ
49	瓦・丸瓦	SK04	端部小片	凸面縄タタキ
50	瓦・丸瓦	SK03	端部小片	凸面タタキ消し

4 まとめ

当地点の発掘調査の結果、遺物については、縄文・弥生土器片、古墳時代（5世紀頃）の土師器、須恵器片、古代（7世紀中頃以降）の須恵器、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、9世紀頃の灰釉陶器、中世（12世紀末頃～13世紀前半頃）の山茶碗頃、江戸時代の陶磁器、瓦頃が出土している。このように多種、多様な遺物群に対し、検出した遺構は、近世および近代の土坑がほとんどであった。

これは、当地が、17世紀以降に、遺跡範囲の南側で東西に続く、佐屋街道に面して造られた泰雲寺と、その東隣に造られた元興寺の寺域北端に接した付近にあたると思われることから、江戸時代とそれ以降に様々な目的で造られた遺構や整地された場所であったためと考えられる。したがって、古墳時代（弥生時代までさかのぼるか）以降の包含層や遺構、東海地方最古の寺院とされる「願興寺」の存在した時期の遺構や包含層が、かつてはあったものの、今は残存していないという状況である。

遺物群の時代は、古代（7世紀中頃以降）以降は、この「願興寺」の動静と連動しており、これまでの史料調査の成果（服部1994、2002）を裏付けるものであるといえる。

古代の遺物のなかで注意されるものに、須恵器・土管がある。同質の土管は、市内では伊勢山中学校遺跡や古沢町遺跡での出土例があり、生産窯址では、愛知県日進市の岩崎77号窯と同県小牧市の篠岡2号窯で出土している。土管は、飛鳥地方の寺院の建築とつながりをもつとされ、尾張地域において中央と密接な関係を示す遺物としている（浅田1985）。特に「願興寺」（尾張元興寺跡）では今回初めて出土したが、出るべくして出土したといえるのかもしれない。ただその使用の実態については、不明である。

また、古代の瓦（12次では丸瓦片90点と平瓦片176点）の凸面タタキ調整別の比率を先行研究（服部2002）にならい示したものが図9である。これらの解析は今後に委ねるとして、今回のデータが5次調査資料の分布に近いこと、2次調査資料も丸瓦の一部を除くと、やはり近い比率分布を示したことのみ報告する。

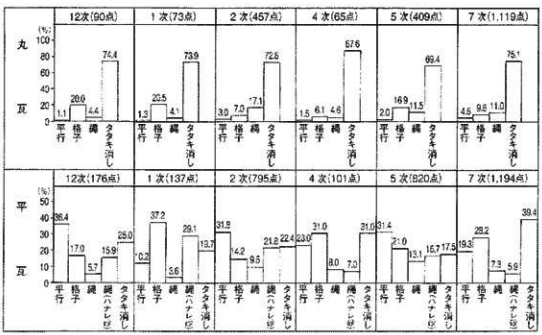


図9　古代瓦の凸面タタキ調整別比率〔12次（今回）と他の6地点※〕（12次の点数は、SX01、SK03、SK04の検出破片数である。）〔※（服部2002）のデータを使用した。〕

《引用・参考文献》

浅田員由　1985　「須投窯における土管の生産について」『愛知県陶磁資料館研究紀要４』　愛知県陶磁資料館

木村有作　2004　「第３次調査　遺物」『古沢町遺跡（第３次・第４次）』埋蔵文化財調査報告書 50　名古屋市教育委員会

城ヶ谷和広　2007　「愛知県下における須恵器生産と流通」『研究紀要　第８号』（財）愛知県埋蔵文化財センター

名古屋市見晴台考古資料館　1999　『尾張元興寺跡第７次発掘調査　現地説明会資料』

服部哲也　1994　『尾張元興寺発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告書 28　名古屋市教育委員会

服部哲也　2002　『尾張元興寺跡第７次発掘調査報告書』埋蔵文化財調査報告書 40　名古屋市教育委員会

平出紀男　1989　『NN － 259 号窯跡発掘調査報告書』　名古屋市教育委員会

村木　誠　2005　『尾張元興寺跡第 11 次発掘調査概要報告書』　名古屋市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	おわりがんごうじあとだいじゅうにじはっくつちょうさほうこくしょ
書　名	尾張元興寺跡第 12 次発掘調査報告書
編集者名	永野裕之
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所 在 地	〒 457-0026　愛知県名古屋市南区見晴町 47　TEL 052-823-3200　FAX 052-823-3223
発行年月日	西暦 2008 年 1 月 31 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
おわりがんごうじあと 尾張元興寺跡	なごやしなかくまさきよんちょうめ 516 ばん 名古屋市中区正木四丁目 516 番	23100	7 － 22	35°08′36″	136°53′48″	2007.4.16 ～ 2007.5.18	125㎡	共同住宅建築

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尾張元興寺跡	寺院跡	古代～近世	土坑	弥生土器、須恵器、古代瓦、灰釉陶器、中世～近世陶磁器	市教委第 12 次調査

尾張元興寺跡第 12 次発掘調査報告書
2008 年 1 月 31 日
編集　名古屋市見晴台考古資料館
発行　名古屋市教育委員会
印刷　株式会社アイコー社